■　NPO 法人 日本医学ジャーナリスト協会

「第 1 回日本医学ジャーナリスト協会賞　発表・表彰式・記念シンポジウム」

2012 年 10 月 23 日（火）　午後 6 時 30 分―8 時 30 分　於・日本記者クラブ

第 1 回「日本医学ジャーナリスト協会賞」（2012 年度）は、**山陰放送　「生きることを選んで」**　と　**下野新聞「終章を生きる」**に決定しました

日本医学ジャーナリスト協会が、本年協会発足 25 周年を記念し、質の高い医学・医療ジャーナリズムを日本に根付かせるために創設した「日本医学ジャーナリスト協会賞」は、6 月末までに全国から 35 件の推薦をいただきました。その中から、「オリジナリティー」「社会へのインパクト」「科学性」を選考基準に、協会内に設けた選考委員会で慎重に審議させていただいた結果、第 1 回の受賞者として、次の方々を選ばせていただきましたので、お知らせいたします。

第 1 回　日本医学ジャーナリスト協会賞　受賞作　（2012 年度）

＜大賞＞　山陰放送テレビ総局テレビ制作部
作品名『生きることを選んで』

下野新聞 2025 年問題取材班
作品名 『終章を生きる　2025年超高齢社会』

＜特別賞＞　タバコ問題情報センター
『禁煙ジャーナル』（月刊紙）

特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ
メンタルヘルスマガジン『こころの元気＋（plus）』（月刊誌）

なお、本協会賞の発表・授賞式および記念シンポジウムを、10 月 23 日（火）、午後 6 時 30 分より、東京・内幸町の日本記者クラブ（日本プレスセンター10 階ホールA）で開催しますので、是非、ご出席下さい。

日本医学ジャーナリスト
協会賞

受賞作品のご紹介　第１回　2012 年度

＜大賞＞

受賞者：山陰放送テレビ総局テレビ制作部殿
作品名：『生きることを選んで』

記者時代の谷田さん

難病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の闘病を続ける元テレビ報道記者・谷田人司さんは、発症後、歩く、食べる、話す、呼吸…の自由を失いながらも、「自由が失われても生きる意味はある」と考え、何とか動く指を使い、そのことを人々に訴え、実践してきました。

その谷田さんが単に被写体となるだけでなく、後輩のディレクターに様々に提案し、「生きることの意味」を多角的に探っていく構成が独創的です。

先輩にカメラを向けて撮り続けたディレクターも、撮り続けることの意味を問われ、自分自身に問い続けた、そんな部分も番組の中に出てきて、深みのある内容になっています。

すべてに人の手をかりなければならない身になってなお、ジャーナリスト魂を失わない谷田さんの挑戦精神と番組づくりにかかわったみなさまに敬意を表して、「大賞」に選ばせていただきました。

＜大賞＞

受賞者：下野新聞 2025 年問題取材班殿

作品名：『終章を生きる　2025年超高齢社会』

発想の転換

老いも病も包み込む

団塊世代が後期高齢者となる 2025 年。3人に 1 人が高齢者となり、多死社会を迎えます。不安を抱く県民にこたえ、自らの終章をデザインするために示唆に富む高齢者の生き様を、実名報道を原則としてさまざま角度から描き出しました。

第一部 「足音」、第二部「わが家で」、第三部「老いの物語り」、第四部 「『食べる』への挑戦」、第五部「支えあうまちへ」で構成され、地域色がにじみ出る、地方紙ならではの生活者の視点を貫いています。

いまなぜ在宅医療、在宅ケアなのか、医療技術として病院医療と比較しても遜色がない最先端の在宅医療の姿が鮮明に描きだされているだけでなく、社説やシンポジウムの開催、メーリングリストによる読者とのやりとりなどで、立体的に追い続け、栃木県に住む人々から大きな支持を得ました。

＜特別賞＞

受賞者：『禁煙ジャーナル』編集発行人　渡辺文学殿

1989 年に創刊された月刊紙『禁煙ジャーナル』は、タバコ問題に関する情報を提供するだけでなく、ときに激しく、ときにユーモアを交えて、積極的に提言を行なってきました。

市民運動として極度の資金難に苦しみながら、1000 人以上の医師・教師・弁護士・ジャーナリストなどの読者に支えられて 22 年間、刊行を続け、タバコと健康の問題の解決に大きな力を発揮されました。そのたゆまぬ努力を讃えさせていただきたいと思います。

＜特別賞＞

特定非営利活動法人　地域精神保健福祉機構・コンボ
メンタルヘルスマガジン『こころの元気＋（plus）』編集スタッフ殿

精神疾患を体験した人々自身が、堂々と、すばらしい笑顔で毎号の表紙を飾り、従来の、苦労、暗いというイメージを吹き飛ばしているこのような雑誌は国際的にも初めてといわれます。「私モデルになっちゃいました」という動画インタビューがホームページにアップされており、「精神病になったら隠れて暮らす」という従来の常識を打ち破りました。

精神科医、ソーシャルワーカーなど、専門家といわれている筆者に混じって、この病気を体験した人々が「コンボライター」として、相談にこたえるというスタイルも、新しい時代を切り開くものと期待されます。

日本医学ジャーナリスト協会賞について

2012 年に、日本医学ジャーナリスト協会設立 25 周年を記念し、質の高い医学・医療ジャーナリズムを
日本に根付かせるために創設されました。
第 1 回の募集対象期間は、2010 年 7 月から 2012 年 6 月末まで、自薦・他薦を問わず、2 年の間に
公表された新聞・雑誌・書籍・テレビ・ラジオ・映像、WEB 作品などを対象としました。

日本医学ジャーナリスト協会賞

記念シンポジウムを開催（2012 年 10 月 23 日）

会長　水巻　中正

協会賞準備担当幹事　大熊由紀子

2012 年 10 月 23 日（火）、 午後 6 時 30 分より、東京・内幸町の日本記者クラブにて、日本医学ジャーナリスト協会賞の発表・授賞式および記念シンポジウムを開催しました。

すでに報道でも流されていますように、第 1 回　日本医学ジャーナリスト協会賞　受賞作は次の方々となりました。

授賞式とシンポジウムの模様はそれぞれの受賞者のタイトルの横にある PDF をご覧下さい。

この授賞式の原稿は、協会賞審査委員で当日のシンポジウムのコーディネーターを務めた大熊由紀子さんがとりまとめました。その元となった記録のテープ起しと原稿のレイアウトは、日本医学ジャーナリスト協会の会員でライター＆フォトグラファーの神保康子さんのご尽力によるものです。

第１回　日本医学ジャーナリスト協会賞　受賞作

＜大賞＞	山陰放送テレビ総局テレビ制作部 作品名『生きることを選んで』
	下野新聞 2025 年問題取材班 作品名　『終章を生きる　２０２５年超高齢社会』
＜特別賞＞	タバコ問題情報センター 『禁煙ジャーナル』　（月刊紙）
	特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ メンタルヘルスマガジン『こころの元気＋（plus)』（月刊誌）
シンポジウム質疑応答	
日本医学ジャーナリスト協会賞について： 日本医学ジャーナリスト協会賞は、日本医学ジャーナリスト協会が、2012 年、協会発足 25 周年を記念し、質の高い医学・医療ジャーナリズムを日本に根付かせるために創設したものです。応募作品の中から、「オリジナリティー」「社会へのインパクト」「科学性」を選考基準に、優秀作品を顕彰するものです。	

日本医学ジャーナリスト協会賞 授賞式と受賞記念シンポジウム

■「オリジナリティ」「社会へのインパクト」「科学性」をモノサシに

杉元順子さん

総合司会・杉元順子（日本医学ジャーナリスト協会副会長）：皆さん　こんばんわ！

第１回日本医学ジャーナリスト協会　協会賞の授賞式を始めます。日本医学ジャーナリスト協会賞は、協会の設立 25 周年を記念して、質の高い医学・医療ジャーナリズムを根付かせるために創設しました。今回　全国から 35 点の応募をいただきました。

その中から「オリジナリティ」「社会へのインパクト」「科学性」を基本的な審査基準として、協会内の審査委員会が慎重に審査させていただき、第１回受賞者として４組の方々を選ばせていただきました。

水巻中正会長から、受賞理由を記した表彰状とともに記念のトロフィーをお渡しし、引き続き、審査委員会担当の大熊由紀子さんの司会でシンポジウムを開かせていただきます。

左上／大賞：山陰放送テレビ総局テレビ制作部『生きることを選んで』のディレクター佐藤泰正さん
右上／大賞：下野新聞 2025 年問題取材班『終章を生きる　2025 年超高齢社会』のキャップ山崎一洋さん（右）と、飯島一彦編集局長（中央）
左下／特別賞：タバコ問題情報センター『禁煙ジャーナル』（月刊紙）編集長の山崎文学さん
右下／特別賞：特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ　メンタルヘルスマガジン『こころの元気＋（plus)』（月刊誌）編集長の丹羽大輔さん（左）と、コンボの共同代表宇田川健さん（右）

大熊由紀子：では、素晴らしい活動をなさいましたみなさまを迎えてシンポジウムを始めたいとおもいます。一番バッターは、はるばる松江からお越しくださいました山陰放送の佐藤泰正さんです。受賞作『生きることを選んで』についてお話しくださいますか？

■ALS になった先輩、谷田人司さんと一緒に、想いを生かす番組づくり

佐藤泰正さん：この番組の主人公は ALS 患者で、わたくしども山陰放送の元報報道記者、谷田人司、50 歳で、私の先輩にあたります。現在も、在宅で番組の企画などの仕事をしています。この席では谷田さんと呼ばせていただきます。

谷田さんは 2008 年、ALS という難病を患って、身体が次第に不自由になりました。そして、会社で仕事ができなくなって、自分の目の前から姿を消してしまいました。制作の動機はこのことが、個人的にひっかかるといいますか、気になっているといいますか、そういうふうな状況があって、なんとか谷田さんの想いを、番組にできないかということをずっと考えていたわけです。

そして、番組にするにあたってはやはり谷田さんは会社にいる間はずっと、報道記者でしたので、おそらく自分の病気 ALS のことについてどんどん追求していきたいだろうと。それから ALS というのはご存知のとおり身体がどんどん不自由になっていく病気ですので、その中で自分の命というものを見つめ、考えているのだろうと思いまして、それを谷田さんの方にぶつけてみたところ、やはりそうであると。そこで、谷田さんと一緒に番組作りができないかとそういう風に発想したわけです。

では 5 分程度なんですけれども番組のさわりをみていただければと思います。

記者時代の谷田人司さん

■意識が鮮明なまま、身体が一切動かなくなる完全閉じ込め症候群

番組上映　（Na は、ナレーション）

Na：豊かな水をたたえる宍道湖。水の都として知られる、島根県松江市の象徴だ。
Na：去年の夏、谷田さんは体調のすぐれない日が続いていた。
谷田さんの声風 Na：体幹が弱り飛行機に乗れなくなる。遠出は夏のうち。
Na：谷田さんには最後の機会に、どうしても取材したいテーマがあった。それは、TLS についてだ。
Na：TLS。完全閉じ込め症候群。身体の麻痺が極限まで進み、意識が鮮明なまま、身体が一切動かなくなる状態だ。
Na：進行が早い谷田さん。近い将来自分は、今は動く手や指、眼の動きが止まり、TLS になると考えていた。それはパソコンをはじめ、視線や指で文字を指し示す、文字盤も使えなくなり、意思をまったく表せなくなることを意味する。
Na：谷田さんは TLS になった東京の患者家族に、取材依頼をしていた。
谷田さんの声風 Na：私は、楽に死ねる方法があれば、TLS になれば死なせてほしいと、思ったことがありました。私は進行が早いため、数年で、TLS に突入してしまう気がしています。TLS になっても生きることに、どのような意味があるのか、質問させてください。

鴨下章子さん（妻）：こんにちは。

谷田佳和子（みわこ）さん（妻）：こんにちは。はじめまして。
鴨下章子さん：はじめまして。

Na：谷田さんは、鴨下雅之さんの家を訪ねた。

鴨下章子さん：主人です。
谷田佳和子さん：こんにちは。

Na：ALS 患者の鴨下雅之さん 52 歳。5 年前、最後まで残っていたまぶたの動きも止まり、TLS になった。

谷田さん（佳和子さん代弁）：鴨下家はどんな家庭ですか。
（笑い声）
鴨下俊也さん（ご子息）：お父さんがこうやって、家にいてくれて、それを中心にこの家っていうか家族がまわっているというか。なんか、自分勝手な考えしちゃうと、このぼくとかお兄ちゃんのために、生きてくれているというか、そう思うと、尊敬できると。

谷田さん（佳和子さんが代弁）：TLS になっても、生きる意味とはどういうものか。

鴨下章子さん：分かりやすく言えば、一緒に歳とりますよね。
谷田佳和子さん：ああ、そうですよね。
鴨下章子さん：うん。白髪も増えるし、おでこも広くなってくるし、色つやもかわってくるというの。私もありますけれど子どもも一緒に。そういうこともやっぱり生きていればこそですよね。写真の中だったら、歳は絶対とらないからね。まったくそこは違う。
谷田佳和子さん：じ、じ、じっかん？した？　生き続けるのはいいなと実感したって言ってますね（笑い）。
鴨下章子さん：でもねえ、辛いことも多いですよ。

Na：谷田さんはこの夏、もう一つの旅に出た。目的地は、これまでに 40 回以上訪れた、北海道。学生時代、休みを利用してバイクで走り、牧場のアルバイトに、汗を流した。
Na：そして谷田さんは、札幌の時計台に向かった。谷田さんは北海道を訪れるたび、時計台の鐘の音を聞きながら、自分の人生について考えてきた。
（鐘の音）
Na：そして鐘が鳴ったそのとき。
（鐘の音）
谷田さんの声風 Na：今日、鐘の音を、涙なしには聞けなかった。この音を聞き、本当は生き抜く自信を持てていないことに気づいた。時計台の鐘が、俺の背中を押す。TLS を恐れずに生き抜けと。

Na：谷田さんは、文字盤を指差した。
谷田佳和子さん：つよく、いき、ぬく。

映像ここまで

大熊：ありがとうございました。

佐藤さん：この番組の放送後には、付けました資料にも書きましたけれども、民間放送教育協会さんのホームページにですね……、

大熊：みなさま、お手元の、この資料をごらんください。（資料は文末に掲載してあります）

■ホームページがパンクするほどの大きな反響が

佐藤さん：はい。放送直後に 150 数名の方が書き込みをしてくださいましてホームページが一時つながりにくくなるというふうな状況になったりしました。非常に熱心に観ていただいたということで制作者冥利に尽きるといいますか。そのような気持ちになりました。あと、この民教協は事務局が TV 朝日さんなのですが、TV 朝日さんに多くの視聴者の方が再放送を求める電話をかけてこられて、その結果、BS 朝日さんですとか、東京 MX テレビさんなどでも再放送をさせていただきました。

また、反響としましては、医療系の学校や中学校、高校、大学の市民講座など教育機関の方から、DVD の貸し出しをしてほしいという要望が、ずいぶん寄せられておりまして、今も続いているということです。ところで、主人公の谷田さんですが、まだ到着していません。谷田さんはきょうの会にあたってコメントを書きましたので、ここでご紹介します。

■谷田さんが１日以上かけて打ったメッセージ

「このたびは『生きることを選んで』を、第一回日本医学ジャーナリスト協会賞、大賞に選んでいただき、大変光栄に思います。同僚の佐藤ディレクターのおかげで、番組内で記者として取材させていただいたことは、記者冥利に尽きます。生きる意味とは何か、深く考える、得難い経験をさせていただき、感謝しています。私は一昨年の９月に、気管切開したうえで、人工呼吸器をつけました。

この重大な決断の決め手は、セカンドオピニオンで人工呼吸器を着ければ、寿命まで生きられると言われたことです。告知の時は、余命が３年から５年といわれ、夫婦で大泣きしていましたので、一筋の光明が見えた気がしました。この２年半の間、もし死を選んでいれば、子どもたちの成長を見ることはできませんでしたし、楽しいことを経験したり、生き甲斐を感じることもありませんでした。何より家族とともに、歳を重ねることもできませんでした。

しかし私は今まで、しばしば生き抜く決意が揺らいでいました。緩和ケアを医師にお願いしたこともあります。痰の吸引を拒み、窒息しようとしたり、自分で呼吸器のチューブを外したこともありました。病の進行の辛さから、家族愛を忘れてしまうこともありました。そんな時に励ましてくれたのが、妻や訪問看護師さんなど、周りの方です。話を聴いてくださり、ずいぶん救われました。私はこうして、心がぶれながら、生き抜く決意が固まっていくのだと思います。

一方、生きる前提として、社会的介護が必要です。ヘルパー、訪問看護、入院を受け入れる病院といった、社会的介護がないと、患者は家族が疲弊すると気を遣い、死を選ぶケースがあり得ます。

家族の絆があっても、療養環境が整わないと、生きることを断念することもあり得ます。現状は、介護医療体制の地域格差があり、大きな問題となっています。こうした問題が解決に向かい、生きようと願う患者が増えることを願っています。」

（拍手）

大熊：ありがとうございました。
　谷田さんは、ご自宅では、いまも、パソコンを操っておられるのですか？

佐藤さん：番組のための取材をしていました去年に比べると、だいぶ、こう、パソコンの操作が難しくなってきてはいますが、ゆっくりゆっくりと、打っています。いま読み上げました文章は、たぶん相当な時間がかかったんだと思います。これだけ打つには丸一日以上かかったんじゃないかと思うんですが。

大熊：いつも使っていらっしゃるパソコンを東京まで持ってきていただくのは大変なので、透明な文字盤を使って、質問に答えてくださいます。何を質問しようかなって、心の中で考えておいていただきたいと思います。
　ところで、この番組の録画が教育関係でとても、使われているそうですね。この番組の推薦者は複数いらっしゃるんですけれども、東京医療保健大学の先生、真野響子さん、いらっしゃっていますか、ちょっとお立ちくださいませ。
　推薦者のお一人で、学生さんの教育に使っていらっしゃいます。
　録画した DVD はどうやったら貸していただけるものなのでしょうか。

佐藤さん：民間放送教育協会さん、文科省認可の財団法人でして、教育目的の DVD の貸し出しを事業の一つとして行っておられます。申し込み手続きをしたら貸し出しができるということになっています。
（http://www.minkyo.or.jp/　〒106-8001 東京都港区六本木 6-9-1 テレビ朝日内）

■仕上げをしている時に、食道静脈瘤が破裂し、「生きる意味」を身をもって

大熊：今日ここに、番組の構成をなさった金杉文夫さんがいらっしゃっています。こちらへあがっていただけますか。
　番組を構成をする上で、どんなことを考えながらされたか、それから制作の最中にご自身が死線をさまよわれたとうかがいましたのでそのことについてもお話いただけるでしょうか。

金杉文夫さん：先ほど、佐藤ディレクターの方から、民教協の話が出ましたが、大変名誉なことでして 2 年続けてですね、昨年は青森の袰月というところの限界集落で番組をつくりました。
　今回は、谷田さんを中心とした、ドキュメンタリーをつくったわけですが、私は放送作家ですので、一人でも多くの方に観てもらって視聴率をとりたいっていうのは、35 年近くやっているんですが、自分に課しています。その中でも、この ALS に関しては、私の、本当に親しい友人が、3 年前、亡くなっています。とっても思い入れがあった作品です。
　最後の仕上げで佐藤さんには、大変迷惑をかけたんですが、ナレーションを書いている、最後のナレーションの仕上げをしている時に、食道静脈瘤が破裂しまして、で、浦安の順天堂大学病院に担ぎ込まれました。で、私自身、

金杉文夫さん

ずっと構成打ち合わせをしていて仕上げの段階までいって、谷田さんの言っていた生きる意味っていうのをどれほど真剣に考えていたかなとは、自問自答したんですけれど、ストレッチャーに乗っていて、それから 50 日間入院している間に、生かされているんだなというのは少し感じました。

そもそも私が吐血したときに、妻がそれを気づいてくれたんです。私自身はもう思考能力が低下していまして、血を吐いたと分からずに、貧血状態でトイレに倒れていたんですね。妻が救急車を呼び、まあ、結果として助かるんですけれども。

今回の谷田さんの作品でも、奥さんの美和子さんが、時に夫婦喧嘩をしたり、同じ列車に乗りあった運転手と、乗客ではなくて、切符を切る乗務員、という、その心の変化が、少しでも描ければいいなと、思って、最後まで関われたことを私自身、とても誇りに思っています。

大熊：ありがとうございます。命を救った奥様の優子さんが会場にきておられます。奥様、お立ちになってお顔を見せてくださいますか。命の恩人でいらっしゃいます。

どうもありがとうございました。

（拍手）

※②へ続きます

（①から続く）

■「自分がもらったみたいです」と取材した方々が祝福してくださいました

大熊：それでは今度は、『終章を生きる　2025 年超高齢社会』で受賞なさいました下野新聞の、山崎一洋さん。パワーポイントを使ってお話くださいます。

山崎一洋さん

山崎一洋さん：下野新聞社会部の山崎と申します。賞を頂戴しました連載は、賞を頂戴しました連載は、若林真佐子と須藤健人と私の３人が担当しました。

（拍手）

第一回の栄えある賞をいただきまして、大変感謝を申し上げたいと思っております。今日は特に取材でお世話になったお二方が、おいでになっています。お礼を申し上げます。

栃木県の小山市を中心に在宅医療に非常に力を注いでいらっしゃいます、太田秀樹先生、そして、栃木県の那須塩原市で NPO 法人ゆいの里を運営され、高齢者の地域での暮らしを支えていらっしゃる飯島恵子さんです。本当にありがとうございました。

大熊：せっかくですから、お二人、お立ちください。

（拍手）

医療の専門家と福祉の専門家がとってもうまく手をつないでいらっしゃるのが、栃木の特徴かなと思います。どうぞお続けください。

山崎さん：ありがとうございます。もう一つ、今回、賞をいただくということが決まってから、取材をさせていただいたたくさんの方から、「おめでとう」と祝福をいただきました。「自分がもらったみたいです」と言ってくださった方が、何人もいらっしゃいました。地方の新聞社が現場を歩いて、読者と一体になって、ものを伝えて行く、そういう大切さや役割というのを痛感しました。この場を借りてそういう方々へもお礼を申し上げたいと、思っています。

私たちの問題意識は『終章を生きる 2025 年超高齢社会』というタイトルに現れています。

高齢化が進むということはもうみなさんご存知の通りです。私たちも、一般論としては聞いていたということがありましたが、「2025 年」というタイミングを捉え極めて深刻な問題が浮かび上がることに気付き、危機感を持ったところがスタートでした。

それでは 2025 年ってなんなのか。1950 年に生まれた、いわゆる団塊の世代の方々が、75 歳を迎える年です。医療制度の話で言えば後期高齢者になるということになります。それでは 75 歳ってなんなのか。今は人生 90 年という言い方もしますが、過去の研究で、性別に関わらず、多くの方々が 75 歳を境にして急速に虚弱化していくことが分かっています。つまり、介護が必要になる方が、これはもう否応なく増えていくということです。つまり団塊の世代の方が、そういうところにさしかかる、それまでになんらかの

下野新聞

11・12・13

2025年とは

団塊世代
75歳に

終章を生きる プロローグ

2025年 迫る超高齢社会

問われる今後15年

「笑顔」の未来実現へ

2025年―。
昭和の始まりから100年目となるこの年、日本は65歳以上の高齢者が総人口の30%を超え、現役世代が激減する人口構造に入っていく。「超高齢社会」の到来だ。本県も例外ではない。とりわけ北関東など県東部で高齢化の進行が著しく、1人暮らしの高齢者は約8万6千人、全世帯の約12%に達する。私たちがまもなく迎える未来は、長生きを心から祝福できる社会になるだろうか。

医療保険制度は、医療費の抑制を目的に、医療費の自己負担の増加、診療報酬の引き下げ、薬剤の使用制限などを進める。一方で、社会保障費は、増加する高齢者の介護費用などにつられて社会システムの崩壊を招く恐れがある。在宅医療や介護サービスが拡充されなければ、現役世代も足しでいく、病院や自宅で看取りの場所さえ定まらないまま最期を迎える「終末難民」が続出するかもしれない。

高齢者が高齢者の介護をせざるを得ない。高齢者を支える現役世代も減り続けている。年金・医療といった社会保障制度の根幹が揺らぐ。

高齢者を支える現役世代も減り続けている。年金・医療といった社会保障制度の根幹が揺らぐ。

超高齢社会が到来する。豊かな社会の実現には、今まで以上の歩みがまめられる
=杉浦崇仁撮影

対応をしなければならない。そうしなければ、この時代が不幸な時代になってしまうのではないかと考えました。

栃木県の新聞なので、栃木県のデータとしてここは紹介させていただきます。全国的に同じことですが、一つは高齢化率が 30%を突破してくるということです。地方であっても、いわゆるニュータウンであるとか、都市部であるとか、そういうところでは急速に、高齢化が進んでいくこともあります。

ある、試算データでは、2030 年に全国で 47 万人の、看取り難民という方が発生していくことが分かりました。つまり、病院に入院もできない、介護施設にも入れない、自宅でも過ごせない、という方たちが続出するということです。最期の過ごし方は、人それぞれとはいえ、不幸な人が、たくさん出てしまうのではないか、そういう認識を持ちました。昨年の 12 月から 6 月末まで、原則実名のルポルタージュで 50 回の連載を展開しました。

これを軸に、さまざまな特集紙面などの報道も、展開していったところです。

全 5 部構成で、第一部『足音』は、既にさまざまな超高齢社会のきざしが生まれていることを描きました。とりわけショッキングだったのは、孤立死と非常に近い概念ですが、「直葬」というものが増えているということです。病院で亡くなると、身内の方がいないために、即火葬場に運ばれてしまう。そういうケースです。

第二部『わが家で』は、在宅医療、在宅介護、あわせて在宅ケアの可能性を現状から見ていこうとの狙いでした。

第三部『老いのものがたり』は、医療技術が進歩し大きな恩恵を受けている半面、穏やかに老いていくことを忘れていないか、そういう問題提起をしたいと考えました。

第四部、『「食べる」への挑戦』はクローズアップされています胃ろうの問題です。胃ろうは、一たん付けたら外せないと思い込んでいる方も多いのが実情ですが、実はそうではないケースも見逃されています。「外すことへの挑戦」を取り上げました。

第五部、『支え合うまちへ』のテーマは、厚生労働省も進める地域包括ケアシステムです。超高齢社会の地域には何が必要なのかに光を当てました。

■病院では食べられなかった食事を楽しめるように、亡くなる日もお風呂に

特に、第二部「わが家で」、第三部「老いのものがたり」を重点的にお話をさせていただきます。

あるがん末期の 76 歳の男性を取材しました。この方の病状は非常に厳しい状態になっていて積極的な治療が難しく、入院先から在院日数の関係で退院を促されました。家族も本人も自宅に泣く泣く戻った方です。経管栄養のチューブなどいつもの管が体に付けられ、口から食べられない、がんの症状として息苦しいといった状態ですので、本人や家族からすると、いわば「家に帰されてしまった」と感じるような状

況でした。この方は昨年末、自宅で大きな不安を抱えたまま、療養を始めましたが、在宅医の先生の訪問診療、訪問看護が届いて、24 時間体制のフォローで徐々に落ち着きを取り戻しました。お家に帰ってから亡くなるまで１ヵ月の間に、病院では食べられなかった食事を楽しめるようになりました。

亡くなる日の午前中にもお風呂に入れたり、１月３日の誕生日に、家族とともに喜寿を迎えることができました。この右側にある写真を見ると、一番右にいるお父さんが、病気なだけで、ふつうの団らんみたいな雰囲気があると思います。こういう雰囲気の中で非常にいい時間を過ごせたのだと思います。この地域はお葬式の後、火葬してすぐその日のうちに納骨をします。納骨のため裏山のお墓に行った帰り道の、奥さんと娘さんの表情は笑顔です。もちろん何も後悔がないということはないとは思います。しかし穏やかな豊かな時間を過ごせたということが、この表情から見て取れるのかなと考えています。

第２部　わが家で

下野新聞

終章を生きる

自宅で看取り、家族は…

故人の思い胸に未来へ

こういう報道をする中、いくつも反響が寄せられました。栃木県の北部に住む 59 歳の女性が、こういう手紙をくださいました。

「記事を読むたび、自宅で最期を迎えられる幸せを感じ介護できるかもしれない、という想いが湧いてきます。」

発信する側からすれば、こんなにうれしいことはありません。いろんなことに気づいていただいて、行動をしてくれています。少し戻りますけれど、ちなみにこの右側にいらっしゃる７６歳の男性の娘さんは、全く医療とか介護に携わっていない方でしたが、今、半年間の介護職員の研修に取り組んでいます。自分も家で過ごすことの手伝いができないかと、生き方を少し変えたそうです。

もうひとつ、先ほどご挨拶いただきました太田先生にお世話になった部分です。自らの老いを見つめた印象的な男性がいらっしゃいました。83 歳の方で、おそらく肺癌だろうという症状だったんですが、ご本人は病気も含めて、それが自分の老いていくことだと受け止めていました。だから、検査も治療もしないことを貫きました。緩和ケアだけを受けながら、自分らしく最期までお家で時間を過ごされたという方です。

この方の胸を打つ言葉は、「私はね、たたかわない」というものです。取材する記者も、こういう気持ちに立てることの崇高さを感じ、震えるような思いで話を聞かせていただきました。

胃ろうの問題では介護施設にアンケートをしました。胃ろうを着けている入所者、利用者の８割は、要介護５であることが分かりました。胃ろうは、再び口から食べられる可能性が高い方にとっては有効な人工栄養の手段だと思いますが、回復の見込みがないとすれば、難しい問題が生まれてきます。高齢終末期に胃ろうは、延命か、自然のまま天寿を全うするか、そういうことを突きつけています。今にそれを考えなければいけないと感じています。

下野新聞　2012年（平成24年）6月29日（金曜日）

「命の質」最重視を

豊かな終章へ本紙取材班が5提言

視点変え未来拓こう

下野新聞

提言　下野新聞

1 超高齢社会を意識し「命の質」最重視を
2 在宅ケア いつでもどこでも可能な体制に
3 自然な老いを見つめ直そう
4 終章の生き方、熟考し共有を
5 最後まで安心して支え合うまちに

そういう報道を通じて取材班として 5 つの提言をしました。具体的に 5 項目ありますが、時間の関係がありますのでこれは端折ります。やはり、今一番考えなくてはならないのは、「命の質」だと思います。これを最重視して、自分の最期の姿、人生の締めくくりの時間をどう過ごすか、それを考えなくてはいけないと呼びかけて連載とキャンペーンの報道を締めくくっております。

大熊：ありがとうございました。

（拍手）

大熊：谷田人司さんがお着きになりました（拍手）。前の方に来ていただけますでしょうか。

ただいま人工呼吸器の電源をセットなさるなど準備中でいらっしゃいます。その間の時間を利用しまして、下野新聞のこの作品の熱烈な推薦者、太田秀樹ドクターに、どこがすごいかというのをひと言、お願いできますか。

■取材の深さに敬服、影響力に驚き

太田秀樹さん：ただいまご指名いただきました、太田でございます。私は在宅医療に力を入れている町医者でございます。今回推薦をさせていただいたんですけれども、プロの物書きの方々に向かって私が拙い文章を送るということに非常にあの、抵抗感があったりました。幸いといいますか、このような賞につながったということで、誠にご同慶のいたりというような気持ちでございます。

私は自治医科大学に勤務していた縁がございまして、20 年前に、在宅医療に力を入れ始めました。20 年前といいますと 1992 年でして、まだバブル経済が少し名残を残していたような時代でして、その時代に往診する医者っていうのはもう本当に、後ろ指さされるような存在でした。高齢者医療をやるような医者なんてろくなもんじゃないというような、まあそんな評価でございました。在宅医療は、粗悪で安上がりな医療だという論調も決してないわけではなかった時代でございます。

推薦者の太田秀樹さん

言ってみれば絶滅危惧種（笑い）で非常に珍しい存在で、その後メディアの取材を受けるような機会が非常に多うございました。非常に勉強をして来られる方と、非常に勉強をして来られない方（笑い）と分かれてですね、出てきた記事を見てがっかりしたり、することもございました。

そういう中でメディアの人たちとのお付き合いは非常に多く、全国紙の方も何人も来られましたけれども、最終的には、クールに付き合うというスタンスになりました。といいますのは、すでに記事ができあがっ

ているといいますか、ストーリーがあって、いいとこだけ取っていかれるような方もおりましたので、クールだったんです。

ところが、今回、下野新聞の方が、実は記事が 12 月からルポルタージュの記事が始まっているんです。そこに、春頃ですね、やってきたんですね、下野新聞の方が。こういうプロジェクトがあるんだけれども、勉強したいというのが最初でした。「取材をしたい」んじゃなくて「勉強をしたい」ということでした。そこで頭が下がる思いをしたんですが、医療のことを勉強すると言っても、どれだけ理解してもらえるんだろうかという疑心暗鬼の部分もあったんです。ところが、それはそれは熱心でして、在宅関係のフォーラムなどがあると、それが長野県であろうが東京であろうが、その会場に誰かいるんですね。私はまるでストーキングされているような感じでした。どこに行っても「下野新聞です」っていう人がいて、ぎょっとなるぐらい熱心にやってくるんですね。

記事にしたのが 12 月ですけれども、それまで本当に現場の様子をよく勉強されたんですね。ですから、そこがすばらしいと思います。記事にされるときは、それはそれはご苦労があるんだと思うんですけれども、その 1 枚の記事にするまでにそこに費やした労力を、時間で割るとですね、ものすごいものがあったんだろうと、いうふうに思いまして、そこが私が敬服した部分です。

それから記事の反響の大きさにまた驚いたんですね。いくら私が「在宅医療はいいよ」って、「亡くなる前は点滴しない方がいいですよ」といっても、誰も信じないんです。ところが、新聞に書いてあるとですね、「あ、太田先生の言うとおりだ」と信じるんですね。で、誰が言ったんだ、俺が言ったんだ（笑い）と言うんですけれども、いくら直接私が話しても説得力がないのに、新聞が文字にすると、同じ人が言っても説得力が出るというような状況で、啓発していただいたんです。本当に熱心に、在宅医療の本質、高齢社会の抱えている大きな問題を正しく伝えていただいたと同時に、地域の文化を変えるような仕事につながったというふうに思って、本当に敬服している次第でございます。

大熊：ありがとうございました。ちょうど谷田さんの準備がととのい、命綱がつながりました。電源を見つけてコードを引っ張りまして、大変な準備をしてここに登壇なさいました。

それでは水巻会長の方から。

■谷田人司さん、人工呼吸器をつけた身で松江から、はるばる。。

水巻中正会長：協会会長の水巻です。遠路はるばる、東京まで来ていただきましてありがとうございました。それでは表彰状をお渡ししたいと思います。

「表彰状　第一回日本医学ジャーナリスト協会賞　特別個人賞

谷田人司殿

作品名『生きることを選んで』

貴殿は、2012 年度の第一回日本ジャーナリスト協会賞において、頭書の成績を修められました。よって、その功績を讃え表彰するとともに、今後とも医学ジャーナリズムにおいて一層の活躍を期待いたします。

2012 年 10 月 23 日

特定非営利法人日本医学ジャーナリスト協会　会長　水巻中正」

おめでとうございます。
（拍手）

特別個人賞を受賞した谷田人司さん（中央）

大熊：この少し小振りなトロフィーは、ご自宅で仕事をしておられる谷田さんのために用意いたしました。外で受付をしてくださっている古阪秀代さんが、選んでくださいました。
　谷田さんは、かなり医療の取材をされています。がんの患者さんたちの中に谷田さんに励まされたという方が、たくさんおられ、東京にもその話が伝わってきておりました。声をおだしになれませんので、あとで質問が出ましたら、奥様に助けていただいてお答えいただけるとおもいます。本当に遠いところをありがとうございました。
（拍手）

※③へ続きます

自宅で仕事をする谷田さんにはやや小振りなトロフィーが用意された（右）

自宅での谷田人司さん（右）と、谷田佳和子さん

（②から続く）

■超ヘビースモーカーだった文学さん、断煙して 35 年

大熊：それでは、特別賞を受賞された『禁煙ジャーナル』　の編集長、渡辺文学さんどうぞ。
　えにしメールには「ウクレレを抱えて」と書きましたが、それは懇親会で披露してくださるということです。ここでは真面目に（笑い）。

表彰状を受け取り、水巻中正会長と記念撮影をする渡辺文学さん（右）

渡辺文学さん：『禁煙ジャーナル』を発行して 23 年になりますが、実は 1977 年 5 月 6 日が、私の禁煙記念日でございます。この日、駐車違反やスピード違反が重なって、運転免許証が 1 年間停止となりました。その夜 NHK で、「英王立医師会が、タバコを 1 本吸うと 5 分 30 秒寿命が短くなる」というニュースを報じました。当時、公害問題研究会という NGO で反公害・自然保護の運動に毎日取り組んでいるなかで、「タバコの煙も公害」という声が高まっていたタイミングもありました。そのころ、ハイライトを 1 日 3 箱という超ヘビースモーカーでしたが、さっそく電卓で計算すると 10 年以上も寿命が短くなることを知り（笑い）、文字通り「断煙」に踏み切りました。今年はちょうど 35 年目となります。

■中田みどりさんが「嫌煙権」を提唱

　その前の年 1977 年暮れに、コピーライター中田みどりさんが、「嫌煙権」というネーミングを提唱しました。「日照権」「静穏権」「入浜権」などの市民運動が盛んになっていた頃ですので、中田さんは「タバコの煙を嫌う権利があってもいいのでは」ということで人権問題として「嫌煙権」を提唱したのです。
　私は「中田さん、面白いネーミングですね」と言いながら、まだ吸っていました。
　今日は皆さんに差し上げた袋の中に、黄色いペーパーがありますが、これに当時のいきさつや私の想いを書いておきましたのでご高覧ください。
　それから 1978 年から、2012 年、「日本のタバコ事情」について、この 34 年間でどう変わったかという比較表も作成しましたので、あとでじっくりと見ていただきたいと思います。

■多くの方々のサポートがあっての『禁煙ジャーナル』発行継続

　今回図らずも医学ジャーナリスト協会設立 25 周年で「特別賞」を頂きましたが、亡くなった方も含めて、私個人ががんばってきたのではなくて、北海道から沖縄、一部、韓国とか香港とかハワイとか海外にも会員がおりますけれども、だいたい 1500 人ぐらいの方々のサポートに支えられながら、ずっと発行を継続してきた、というのが実態でございます。
　嫌煙権の運動を発足当初から、今日会場に見えています初代会長の牧野賢治さんには、もし、メディア

の報道がなければ、嫌煙権運動は、当初はそんなに盛り上がらなかったと思うんですが、牧野さんが一所懸命報道いただく、それからまた大熊由紀子さんも、朝日新聞の一面の大型コラムや社説で「煙に指定席が必要」「「哀煙」「暴煙」と縁を切るには」とを書いていただきました。「社説」でタバコが取り上げられたのは。これが初めてでした。

そしてまた、田辺功さんや水巻中正さんや、現役時代からタバコ問題についていろいろフォローいただいて、今回そういう過去のことも皆様に評価をいただいて、賞をいただいたんだろうと思います。

日本禁煙学会の作田学理事長も今日、会場にお見えいただいていますが、ユニークなミニコミだということで評価いただき、それから、神奈川県の「受動喫煙防止条例」の制定を推進された関口正俊さんも来ていただいております。

今回『禁煙ジャーナル』の推薦文を書いていただいたのが弁護士の穂積忠夫先生です。東京弁護士会の「人権賞」などに強力な推薦文を書いていただいたのですがそれが実らず、今回初めて穂積先生の推薦文をいただいて特別賞をいただいたということで、感謝しております。あとはタバコ問題情報センターの理事の塚田啓一さん、それから、「タバコは美容の大敵」という WEB サイトを主宰している平賀典子さん、こういった方々が会場に見えておりますので、懇親会の時にでも、スピーチをお願いしたいと思います。それでは、10 分間くらいで 23 年間を振り返ってみたいとおもいます。

■平山雄博士と相談して『TOPIC』を発行⇒『禁煙ジャーナル』へ

最初は 1985 年 11 月、予防がん学研究所の平山雄博士が、タバコ問題で日本で資料がないから何か出していこうよということで、Tobacco Problems Information Center の略で『TOPIC』というタイトルの情報誌を発行しました。1985 年の 11 月から、1989 年の、『タバコと健康』(『禁煙ジャーナル』の前身）の発行に至るまで、世界の状況、国内のいろいろな運動、取り組み、こういったものをまとめて、40 ページぐらいの冊子を 6 回、出しました。

続いて、タバコと健康全国協議会の月刊機関誌として 1989 年の 4 月、『タバコと健康』というタイトルで、創刊号を出しました。当時、全国協議会の会長は、九州禁煙協会川野正七さんという方が会長で、川野氏に代表になっていただいて創刊号に寄稿いただきました。

■国会議員へのアプローチ、国際会議にも参加

1991 年 1 月から『禁煙ジャーナル』と改題をしてずっと続けてきたわけですけれども、重視したのが国会議員への働きかけです。国会審議の中でタバコの煙がもうもうではまともな議論ができないのではないか、と閣議や国会の各委員会から灰皿をなくせという運動に取り組みました。

2002 年の 12 月、当時参議院議員だった小宮山洋子さんに、禁煙ジャーナルがインタビューを行いました。これがきっかけとなって、2003 年 2 月に「禁煙推進議員連盟」をスタートしていただきました。

現在、70 人ぐらいのメンバーが超党派で加入しています。参議院副議長の尾辻秀久さん（自民）が会長で、タバコ値上げの問題や、タバコ規制枠組み条約（FCTC）の推進について、熱心に取り組んでいただいております。事務局長は、浜本宏衆議院議員でした。

国際会議も日本政府に対して大きなインパクトがあります。「アジア太平洋タバコ対策会議」(APACT)、と「タバコか健康か世界会議」ですが、禁煙ジャーナルはその都度参加しました。中国で行われたのは、1997 年です。タバコ大国の中国も、人民大会堂に 103 ヵ国 2000 人が集って盛会でした。アジアの会議と世界会議とだいたい 1 年半から 2 年おきくらいにずっと続いているのですが、やはり日本のタバコ規制対策は非常に遅れているということで、当時から日本が槍玉に上がっていました。そのころはまだタバコの広告がテレビ、新聞、雑誌、週刊誌に溢れていた時代です。今、テレビはなくなりましたが、新聞、雑誌、週刊誌にはまだ盛んに掲載されています。また、最近では将棋大会とかバレーボールとか、さらに CSR（企業の社会貢献活動）ということで植林事業をやったり、オーケストラなどに JT が盛んにお金を出している。こういったことに対する海外からの批判は非常に強いのです。

■タバコ関連訴訟を報道

タバコ関連裁判も禁煙ジャーナルが必ず記事にしてきました。ふつう一般のメディアは、社会的な事件の場合、提訴の時と判決の時は報道するのですが、『禁煙ジャーナル』は口頭弁論の途中経過もフォローしてきました。「第一次タバコ病裁判」の場合、東京地裁で非常にひどい判決が出ました。浅香紀久雄という裁判長が「ニコチンの依存性はアルコールよりはるかに低い」という迷判決で、世界の笑いものになりました。いろいろ調べたらヘビースモーカーだったのです。こういう裁判官をタバコ関連訴訟の裁判長に選任すること自体、非常に問題があると思います。

タクシーも、今全国で 90%以上が禁煙になっていますが、自然になったのではなくて、私たちは安井幸一さんという方を中心に、タクシーの全面禁煙を求めて訴訟を起こしたり、国土交通省や全国乗用自動車連合会に申し入れを行なったり、新聞投書などいろいろとアクションを起こしました。

それから東京裁判に続いて「横浜タバコ病裁判」があります。これも一審の横浜地裁で棄却され、東京高裁で審議が行われていましたが、2011 年 12 月に結審になり、判決が 2012 年 3 月 14 日でしたが、全くひどい判決でした。福田剛久裁判長は「たばこは許された嗜好品である」ということで、何と、判決文の中に「嗜好」という文字が 16 か所もあったのです。

■自治体の「条例」がタバコ規制対策に効果を発揮

千代田区の「路上喫煙禁止条例」がちょうど 10 年経ちました。特に千代田区の場合は、歩行喫煙（路上喫煙）を区の担当者が確認した場合、「過料」を 2000 円頂くということが抑止力になって、今、千代田区のメインストリートにはほとんど吸い殻は落ちておりません。

神奈川県の「受動喫煙防止条例」もずいぶんサポートいたしました。松沢知事とは何回もお会いしまし

たが、現在も松沢さんは「スモークフリージャパン」という会をつくって一所懸命取り組んでいます。
外国人との交流も盛んに行いました。愛媛におられた、マーク・ギブンスさんという方が、日本縦断ウォークで、「禁煙は愛」という幟旗を担いで、鹿児島県の枕崎から北海道の宗谷岬まで 88 日間で歩いたということで、禁煙運動の歴史に新たな 1 ページを加えました。
それからドイツですね。非常にたばこ規制が遅れていて、ドイツと日本とアメリカが、悪の枢軸国などと言われていたのですが、ドイツの国会議員・ローター・ビンディングさんの取り組みによって 2007 年に「受動喫煙防止法」が制定されました。この立役者、ビンディング氏を招いて日本医師会館でシンポジウムが行われ、これも『禁煙ジャーナル』で、しっかりとフォローいたしました。

■FCTC に違反している日本のタバコ広告と CSR

先ほど申し上げた JT の CSR（社会貢献活動）はひどいです。将棋大会、バレーボール、いきいきフォーラム、音楽イベント、植林事業、こういったものは即刻中止してほしいと禁煙ジャーナルは行動を起こしています。たまたま『週刊実話』と、『intelligence』という雑誌が、JT を徹底追及して、日本たばこ産業の経営実態にメスを入れたことがありますが、他のメディアは全然だめですね。最近では『サンデー毎日』で溝呂木雄浩弁護士が「喫煙権を守れ」などととんでもない発言をおこない、また『週刊朝日』がチャンピックスについてきちんとした取材なしにひどい特集を組み、これについて、日本禁煙学会・作田理事長が、公開質問状を出したりして追及しているところです。『週刊朝日』は橋下さんには謝ったのですから、この禁煙についてのいい加減な記事に関しても謝って欲しい私たちは思っております。
あとは JT の「いきいきフォーラム」ですが、これも地方新聞社がタイアップしてやっていますので、こういったものもやめてほしいと思っております。

■タバコ規制枠組み条約（FCTC）の遵守を求めて

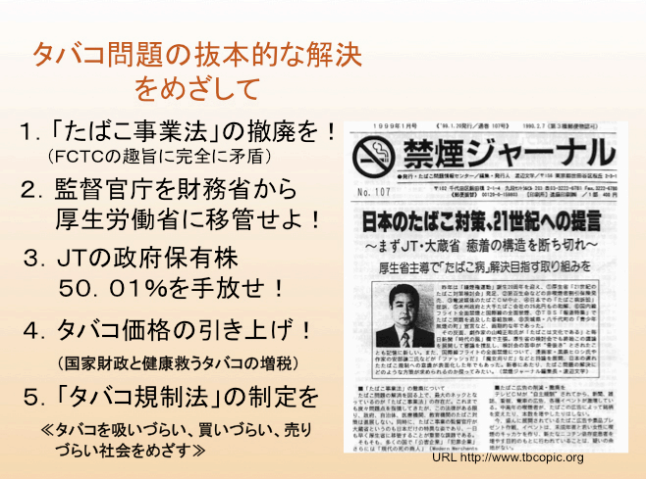
タバコ規制枠組み条約が、2005 年 2 月 27 日にスタートいたしました。ちょうど作田先生が当時勤めておられた杏林大学の中庭で、FCTC の人文字をつくってこれをアピールしたことを想い出しました。
FCTC が 7 年を経過しているのに、日本政府の姿勢は極めて消極的です。タバコ規制枠組同盟（FCA）が声明を出して、もっと締約国は条約の完全実施をと訴えています。やはり日本政府は本当に厚生労働省が財務省の鼻息を窺ってですね、小宮山さんもいろいろ苦労をされたのですけれども、多勢に無勢で実績をあげるまでには至りませんでした。今回、厚生労働大臣も変わってしまい、タバコ規制枠組み条約の動向が案じられています。

■吸いづらい、買いづらい世のなかをめざして

日本禁煙学会が 2005 年 2 月 27 日、杏林大学でスタートいたしました。そのあとずっと禁煙学会が開かれており、松山市では 2010 年、第 5 回日本禁煙学会の総会が行われ、とげ抜き地蔵の来馬明規住職が非常に熱心に仏教施設の禁煙を訴えたのが特徴的でした。
それから、松沢成文知事と林望氏（リンボウ先生）の公開対談を開催いたしました。「受動喫煙根絶に全力を」ということで、ストップ受動喫煙をタイトルにして、私が司会進行を務め好評でした。
タバコと原発。原発の問題も去年福島から、私も福島が郷里なので非常に心を痛めているのですが、非常

に政官財の癒着といいますかね、JT と東電は非常によく似た体質です。タバコ被害と放射能汚染、どちらも人災であると思います。世界は脱タバコ、脱原発を目指しているということで、禁煙ジャーナルでもその方向を目指しています。

問題はやはり「たばこ事業法」です。「我が国たばこ産業の健全な発展を図り、もつて財政収入の安定的確保及び国民経済の健全な発展に資することを目的とする」こういうのが法律にあるということ自体が矛盾しているわけです。



FCTC、タバコ規制枠組条約は、タバコ消費の削減ということが目的ですから、完全に矛盾しており、国内法よりも国際法の方が優先されるべきだということを考えれば、FCTC を重視するならば、「たばこ事業法」という法律は撤廃をしなければと思っております。タバコの監督官庁が財務省というのがやっぱり問題ですね。厚生労働省に移管せよということは故平山雄博士が、生前、口をすっぱくして、厚労省に大政奉還せよと、盛んに主張したのを今でも思い出します。

今、タバコ問題の国際会議では、タバコ会社は「公害企業」「犯罪企業」、最近では「死の商人」と言われており、そのような会社の株を、50%以上持っていること自体、ボタンの掛け違いだと思います。即刻手放すということが必要であると思います。

それからタバコ価格の引き上げ、まだまだ一箱 400 円なんていうのは安い。だいたい 800 円、1000 円、今イギリスとかオーストラリア、ニューヨークではもう 1000 円以上ですから、しかも「国家財政と健康を救うタバコの増税」という論文もたくさん出ています。

やはり最後に「たばこ事業法」に代わって「たばこ規制法」の制定が重要課題と思います。そこで、当面は、タバコを吸いづらい、買いづらい、売りづらい社会を目指す。いきなり法律で全部禁止ということでは、やっぱりアメリカの「禁酒法」の失敗がありますので、当面、吸いづらい、買いづらい、売りづらい社会を目指す。こういうことで、たばこ社会を変えていきたいなということが、『禁煙ジャーナル』の目指している方向です。本来は、『禁煙ジャーナル』とか禁煙運動、嫌煙権運動というのはない方が一番いいわけですけれども、まあしばらくまた続けなきゃいかんかなということで、今日の受賞を機にですね、また心を新たに取り組んでいきたいなと思っております。ありがとうございました。

（拍手）

大熊：ありがとうございました。推薦者の穂積先生には懇親会の方でお話をいただくことにします。きついお話が出てきましたけれども、運動はユーモラスです。「禁煙いろはがるた」をつくったり、「タバコやんなっちゃった節」を作詩して、ウクレレ片手に歌うやら。そういう一面は懇親会の方へまわしたいと思います。

※④へ続きます

（③から続く）

■読者にとって「私たちの雑誌、私の雑誌」

大熊：それでは、一般的に「暗い話」と思われている精神疾患についてのユニークな月刊誌「元気プラス」について、丹羽大輔編集長と統合失調症を体験されたイケメンライター小松達也さんのお二人でプレゼンをしていただきます。よろしくお願いいたします。

丹羽大輔さん

丹羽大輔さん：ただ今、ご紹介いただきました、『こころの元気＋（plus）』という月刊雑誌を出しております、NPO 法人地域精神保健福祉機構（通称＝コンボ：COMHBO）という団体の丹羽です。また、こちらは、読者でもあり、この雑誌に寄稿してくださるライターでもあり、表紙モデルも務めていただきました小松達也さんです。この、『こころの元気＋』という雑誌は、メンタルヘルスを扱った雑誌ですが、まずは小松さんに読者の視点、あるいはライターとしての視点から『こころの元気＋』がどのような雑誌なのかを語っていただきます。

小松達也さん：この雑誌のことを、読者である統合失調症や鬱病をはじめとする精神疾患をお持ちの方たちは、「私たちの雑誌、私の雑誌である」と感じていると私は思っています。その理由は、まず、表紙モデルを当事者がやっていること――私自身表紙モデルをさせていただいたことがあります。また、当事者が自分を語る――僕みたいにライターとして文章を投稿したり、自分を語るシステムがあるからです。そして、投稿者が、小松達也僕自身であって、その僕が当事者であり、その当事者である私が読者であるということが一番大事なことだと僕は感じています。

もちろん、投稿もあまりできなくて、内容に関われない一般の読者の方もいらっしゃると思うんですが、そういう方であっても、やはり仲間が語っている雑誌であるからやっぱり「私の雑誌」だと感じていると思います。

僕は、高校 2 年生の時に統合失調症を発症し、以来 9 年近く療養生活をしていますが、『こころの元気＋』のような、前向きに生きるための雑誌、当事者雑誌と出会い、自分の核となれる物の見方、考え方を身につけることができたと思います。

「コンボライター」の小松達也さん

それは、多様な考え方の受容や、自分の文章を繰り返し読むことによって、同じ考え方、みんな同じことを言っているなと確認ができるのです。他の人たちの投稿は、言い方も違って多様ですが、結局は同じようなことを言っているなということに気づいて、答えは一つなんだ、道は一つなんだ、でもいろんな方法論があるだけなんだというようなことに気づいてから気持ちが楽になったというようなことがあります。

また、『こころの元気＋』が社会に与えた影響――それは別に僕が言うべきことではないかもしれませんが――タブー視されていた、当事者が語るというシステムを採用することに

よって、精神疾患をより一般化したというか、より一般的なものとして捉えられるようにしたことが大きなことだと思います。
やはり、これは私の雑誌であり、私たちの雑誌なので、この受賞をとてもうれしく思います。
（拍手）

■NPO コンボのミッション

丹羽：小松さん、ありがとうございました。それでは、雑誌の紹介の前に私の体験をお話いたします。私自身、およそ 10 年前に鬱病を患いました。そのときに、いろいろな人の体験談を読みたいと非常に強く感じておりました。しかし、当時は有名人の書いた鬱病の体験談の本が数冊ある程度でした。ところが私は、ごくふつうに暮らしている方の体験談が読みたいと思っていたのです。

そして、回復したあとの 2007 年に NPO 法人地域保健福祉機構の立ち上げに私も加わることができ、そのときに核となる雑誌をつくっていこうという話になりました。そのときに、体験談がいっぱい読めるような、そういう雑誌にしたいということを提案し、それを了解していただきました。

NPO コンボのミッションは、「精神障害を持つ人たちが、主体的に生きていくことができる社会の仕組みを創りたい」ということです。これは裏を返せば、現在の世の中は精神障害を持つ人が主体的に生きられない仕組みになっているということです。そういう状況を変革していきたい、そのために私たちは地域で活動する様々な人たちと連携し、科学的に根拠のあるサービスの普及に貢献をする――これが NPO 法人コンボのミッションです。

そうしたミッションの一環としてこの、『こころの元気＋』を発行しています。発行部数は現在 1 万部で、日本で唯一のメンタルヘルスマガジンです。

■「こころの元気＋」を支える、リカバリーと２つの EBP

この雑誌の際立った特徴としては、精神疾患をもつ方が表紙モデルになる、ということです。過去に外国の方も２人モデルになっていただきましたが、もちろんその方達も精神疾患を患った方たちです。

また、読者が記事を書くための「コンボライター」というシステムがあり（先にお話いただいた小松さんもコンボライターの一人です）、現在 700 人以上の方が登録しています。

もちろん、精神疾患の当事者だけではなく、第一線のお医者さん、あるいは専門職の方が分かりやすい記事を書いてくれる、そうしたことがこの雑誌の特徴かなと思っています。

内容の特徴としては、まわりの人にしてみればささいなことかなと思うような、日常生活のことから、最新の医療情報まで、当事者の人から家族までが抱える悩みを、幅広く生活レベルまで広げて取り上げている、それが内容的な特徴です。

その内容を支えるために、「リカバリー」という考え方・理念を根底に据えています。リカバリーについては後でご説明しますが、そのリカバリーという理念のもとに、2 つの EBP をこの雑誌は掲げています。EBP は皆さんもご存知のように、Evidence Based Practice、つまり「根拠に基づく実践」です。

もう一つの EBP は、Experience Based Practice、つまり、「みなさんの体験に基づいた実践」――これがこの雑誌を支えていると思っています。

当事者の人たちが主役であるということにつきましては、この雑誌に原稿を書いてくださっている方の構成を見ても明らかです。創刊後から現在までの執筆者の属性の統計をとっています。創刊号から最新号

までの 68 冊の執筆者の延べ人数は、小さな投稿も含めると 3090 人になります。そのうち、精神疾患をもつ当事者の方が 2229 人で 72%を占めています。そして、医師とか専門職の方がおよそ 20%です。そういう比率になっています。

さて、先ほどリカバリーということを申し上げましたが、これについてご説明申し上げます。ふつうに直訳すれば「回復」ということになります。しかし、この雑誌でいうリカバリーは、ただ単に病気の前の状態に戻ることを意味するのではありません。これはアメリカで言われ始めた言葉ですが、アメリカの当事者の方でパット・ディーガンという方が、「リカバリーとは、人々の偏見、医療による傷つき、自己決定を奪われていること、壊された夢などからの回復」というふうに定義をしています。実は、リカバリーというのは一人ひとりによって全然違っています。人間にはいろいろな可能性があります。どのような病気であろうが、どのような状態であっても、その人のすべてが病気であるというわけではない、病んでいるわけではなく、病気はその人の一部でしかありません。

どのような病気や障害がある方でも、必ず健康な部分がたくさんあります。しかし、病気になると、自分の健康な部分に気づかなくて、病気の部分ばかりを見てしまいがちです。特に、医療に携わる人あるいは家族の人などは、そういう病んでいる部分、病気の部分ばかりを見てしまう傾向があります。しかし健康な部分を広げていく、そして自分自身の可能性をどんどん広げていく――そのことを意識して生きていくプロセスがリカバリーなのではないかと私は受け止めています。

■私たちの夢

なぜこの雑誌では、そのリカバリーということを掲げているのかといいますと、先ほどコンボの掲げたミッションの一つに関連してきます。「病気の人が主体的に生きられない仕組みがある」ということです。残念ながら、そうした環境がどうしても存在しています。人間は自分が置かれた環境や立場で他者に接します。お医者さんという立場であれば、患者さんにおとなしくなってほしいという立場で接してしまうこともあるでしょう。施設の職員であれば、何かにチャレンジして、大失敗をすることを恐れて、何もない無難な人生を推奨する立場で接する人もいるでしょう。

しかし、そうではなく、自分の可能性をどんどん伸ばしていけるような環境をわれわれは創っていきたいのです。それが「リカバリー」という旗を掲げている理由なのです。

さて、私たちのこれからの夢ですが、まだまだ隠れるようにして生きている当事者が大多数である世の中ではありますが、そうした人たちをなくすような刺激を与え続けていくことで、みんながどんどんといろいろなことにチャレンジをして、自分の可能性を広げていくことが私たちの夢です。

■ギネスブックに登場も？

もう少し、ミーハーで即物的な夢もあります。

世界でも唯一の雑誌だと言われていますので、ギネスブックに登録できないかなと思っています。

それからこの表紙の写真展を世界各国でできたらいいなと願っています。また、この雑誌の企画のなかから、鬱病の母親（うつママ）の体験を漫画化して、「うつまま日記。」という単行本を制作しました。この単行本をベースにして、テレビドラマ化したいなと思っています。

我々にはそういうギネスブックとか、海外展示会、テレビドラマなどについて、何も人脈がありませんので、そちらの方面に詳しい方がいらっしゃいましたら、ぜひ教えてください。

この雑誌は、本屋でも販売しておりませんし、新聞で広告を出すこともないため、なかなか人に知られることがなくて苦労をしています。ぜひ取材をしていただければ幸いです表紙モデルになった方も、取材に応じてくれることができる方がたくさんおりますので、これからも応援していただきたいと思います。

本日はこのような光栄な場にお招きいただきいただきましてどうもありがとうございました。

（拍手）

表彰状を受け取る丹羽大輔さん（中央）と、
コンボの共同代表の宇田川健さん（右）

■10 年前だったら不可能だった表紙のアイデア

大熊：ギネスに載るような斬新な「表紙にご本人たち」というアイデアのきっかけを。

丹羽さん：ええとですね、表紙にこういう当事者の方をモデルにするというのは実は出版のタイムリミットぎりぎりまで思いつかなかったですね。というのはそういうものは今までなかったですし、そういったものは我々の頭の中に何もなかったので、全くそういったことはアイデアとして浮かばなかった。でも、どんな表紙を構想しても、何か違和感は感じていたんです。あるとき、自分の子どもが小さくてですね、育児雑誌をぱらぱらと見ていた。その表紙、育児雑誌なので赤ちゃんが表紙だったんですけれども、その雑誌の中に、表紙になる読者モデル募集という記事というか募集がありまして、「あっこれだ！」という。なんかずっと表紙のことばかりを考えていたときにそれを見たので「この手があったか！」とインスパイアされたというか、それで、当事者を表紙にするという手が浮かんで、周りに相談したら、今の時代だったらそれはできるだろう。10 年前だったら不可能だったかもしれないけれど、今だったらいけるんじゃないかということで、GO が出たということです。

大熊：ありがとうございました。みなさまのお手元に、本の表紙がずらっと並んでいる資料があります。その、真ん中から開けていただいて、左ページの上から 3 番目、真ん中のところに小松さんの素敵な表紙が載っています。木に寄りかかっている、まるで、俳優さんのようです。ご覧ください。

※⑤へ続きます

（④から続く）

大熊：これから質問タイムに入りたいと思います。
谷田さんのメッセージは先ほど佐藤さんが読んではくださったんですけれども、少し谷田さん何か付け加えてくださいますでしょうか。

谷田佳和子（みわこ）さん：今、特にはないそうです。

大熊：奥様のお言葉をひと言お聞きしたいというメモが入って参りました。

中央が谷田佳和子さん。マイクを持っているのはご子息

佳和子さん：このたびはこのようなすばらしい賞をいただき本当にありがとうございます。娘が東京の大学に進学しましたので、今日は息子と３人で来まして、このあと娘と待ち合わせをしておりまして、図らずも家族旅行になっております。またこのあと何かありましたら。

大熊：鴨下さんのご家族はいらっしゃいますか？

佳和子さん：鴨下さんも今日、息子さんと一緒に。

大熊：さきほど佐藤ディレクターがうつしてくださった「さわり集」の映像中で、閉じ込められ症候群の旦那様について、「遺影になってしまったら歳をとらないけれど」おっしゃったお二人です。何か補足することがありましたらどうぞ。

■番組を評価していただいて、「がんばれがんばれ」とエールをいただいたような感じが

鴨下章子さんとご子息の俊也さん

鴨下章子さん：ダイジェスト版を観まして、改めて思ったことは、皆様に番組を評価していただいて、「生きることだ、がんばれがんばれ」ってみんなにエールをいただいたような感じでした。やっぱり、うちの主人が生きていてくれて、すごくよかったなと改めて思いましたので、家に帰りましたら、必ずこの、大変な賞をもらったことと、応援してくださっている皆様のことを伝えたいと思います。ありがとうございます。
（拍手）

大熊：ALS の方はまず人工呼吸器を着けて生きるかどうかで大変な決断を要します。それを谷田さんは乗り越えられたんですけれども、次に、眼も動かない、手も動かない、世の中と何も交流できなくなってまで生きるかどうかというところで、とても悩まれます。その答えを、鴨下さんのところで見つけられたのですね。

それではせっかくの機会ですので、透明文字盤で、答えてくださいますので、ご質問どうぞ忌憚のないように、どんなことでも結構です。あとの懇親会があるのであまり長くは伸ばせませんので、早い者勝ちです。どうぞ。

ジャーナリストがウヨウヨいらっしゃるわけですから、何か質問はないでしょうか。ちょっと目が動いた NHK の鈴木さんなどはどうでしょう。テレビの番組をつくっていらっしゃる方です。

鈴木紀郎さん：NHK の OB の鈴木です。谷田さんにお伺いしたいんですけれども、プロデューサーの立場であり、出演された方としてですね、この作品をご覧になって、佐藤さんの作品をどのように評価されていますでしょうか。

大熊：なるほど。

谷田佳和子さん：（文字盤を読む）：よく、まとめた。葛藤の部分がよかった。

鈴木さん：今度逆に佐藤さんにお伺いしたいんですけれど、お医者さんは自分の身内を手術するとか、そういうのは非常にしにくいということを聞くんですけれど、ディレクターとしてですね、自分の上司を取材対象にして番組をまとめるというのはどういう気持ちだったんでしょうか。

佐藤さん：先ほど、番組の企画したきっかけについて少しお話したんですが、いたく個人的な気持ちでスタートはしたんですが、いざ、始めてみるとですね、正直申し上げまして、先輩後輩の関係でもありますし、相当病気が厳しくなってくる精神的な部分もございますし、相当激しい葛藤がありましたよね。かなり厳しい局面も、人間関係の上でもありましたけれども、まあ、やっているうちにお互いの気持ちがわかる部分が、同じ仕事をしていたという部分がありますので、そこはなんとか乗り越えられたのかなということでですね、結果オーライだったかなということしか言いようがないです。

佐藤泰正さん

■葛藤、そして感謝

大熊：具体的に言うとどういう葛藤ですか。

佐藤さん：えーとですね、こちらの取材意図が理解してもらえるかどうか、受け入れてもらえるかどうかみたいなことだとか、あとはコミュニケーションが、取材を始めた当初からそんなにスムーズでは、肉体的な問題ですが、なかったものですから、そこで行き違いが生じたりですとか、そういうふうなことで、けんか寸前とまではいきませんでしたかね、相当もめたといいますか、そういうふうな時期もありました。

大熊：もめたといえば、テレビの中でも、奥様が最初、「仕事をこんなになってまで持ち込むの？」と腹を立てたという、それはどういうふうに変わっていったんでしょうか。

佳和子さん：私は、主人が仕事を持ち込んだとは思ってなかったんですけれども、番組になったときに、佐藤さんが、どうも奥様は仕事を家庭に持ち込んだのではないかと思っておられるのではないかという形で（笑）。私の気持ちとしては、最初はそういうふうには思っていなかったんです。

葛藤があったっていうのは、主人は呼吸器を着けて生きる方を選んでいますけれども、私としては、そういう生き方を、番組が前面に押し出して応援してくれるのかなと思ったんです。けれども、佐藤さんのお気持ちとしては、つけない方が８割いらっしゃるということで、そちらの方のお気持ちというか、そういったことも、本当に半々ぐらいな形で出したかったようなんですね。

そうすると、主人が生きているっていうことがなんだか否定されたような、私としてはそういう気持ちがしました。それて、あの番組の中で、怒りを感じたという表現になっていたんです。葛藤、どこまでを、どういった番組にするか。

で、今回本当に佐藤さんはよくまとめられたなと思いましたのは、やはり、観ている方に、なんと言いうんですか、キャッチボールを投げて、そして考えてくださいという形で、脚本も金杉先生と一緒に本当に一生懸命考えてくださいました。今、振り返ってみまして、主人が、佐藤さんっていう後輩に恵まれて、このような、病気になっても全社を挙げて応援してくださっている。「あ、谷田さんどうしてるかな」って、いうふうに、同じように感じてくださった。私も仕事をしていますので同僚の方が病気になられても、なかなか何かするっていうことが、実行に移すっていうことができないでいます。それを実行されたというところが、本当に。

夫婦で話すときには「佐藤さんありがたいねえ」って言ったら涙がわーって出てくるんですけれども、主人が。そういうところも表面的にはなかなか恥ずかしくて言えなかったりしました。

今日も佐藤さんお一人でも、いらっしゃれたと思うんですけれども、お礼の意味もありまして、来させていただいております。この場をお借りして、ありがとうございました。

大熊：ありがとうございました。
（拍手）

大熊：佳和子さんは高等学校の先生でいらっしゃるので、今日は休みをとっておこしくださいました。この時間ではもうお帰りになれないので、一晩お泊まりになります。そういう犠牲を払ってここへ来てくださいました。先日、わたし、毎日新聞に、「イクメンが日本を救う」というコラムを書きました。その記事をお送りしながら、「人司さんはイケメンだけど、仕事人間で、イクメンではなかったのでは？」っていうメールを送りましたら、佳和子さんから「彼はイクメンでした」っていう弁護をするメールが届きました。朝ご飯は必ず人司さんがおつくりになったということでした。うなずいておられる丹羽さんは、千葉の方のイクメン同盟の方であります。

他にどうでしょうか。もうあと一問くらいで隣にいかないと、せっかくのごちそうが食べられなくなっちゃうという、切羽詰まった状況にありますが。

どなたか。文字盤を使って答えをしていただくなんてチャンスはめったにないので、もったいないですから。

大熊：下野新聞のみなさま、これだけ幅広く取材なさって、矛盾に突き当たったり、壁に突き当たったりということはありませんでしたしょうか。

■気づいただけでもだめ、実体験を伴わないと難しい

山崎さん：すいません、ちょっとすぐに思い浮かばないところがありますけれど、実は、連載と並行しながら、地元の宇都宮大学と連携をして公開セミナーを私たちも講師になってやったんですね。そのときにやはり関心のある方が、60 代 70 代くらいの方が多かったんですけれど、聞きにきてくださって、先ほどお話したような在宅ケアのお話なんかをすると、そうだよな、そうですよねって聞いてくれて、少し気づきにつなげられたのかな、なんて、お話をしながら思ったりすることもあったんですけれど、その中で多かった反応というのが、終わったあとに、いやーいいねえ、ああいうのができるといいねえ。でも自分には無理だね。っていうことがあったんですね。

やっぱりその、なんとなく頭では分かっても、在宅っていうところに落ちていかないっていうですね、やっぱりこれは過去の経過といいますか、そういうことがあったりとか、たとえばそれで 60 代 70 代の方が、実は病院で、誤解を恐れず言えば、あまり満足できる形じゃなく、親を看取っているとか、そういうことが自分の体験にあるために、次の発想の転換の邪魔をするのかなとかですね、そういう意味では意識の変化っていうのは、気づいただけでもだめだし、どこか実体験を伴わないと難しいのかなということを感じました。私自身これをやって思ったのは、「在宅医療で豊かな時間を過ごせてよかったね、幸運だったね」っていう感じが、数年前までは少なくともあったと思うんですけれども、これから先は、望んだら、望む人がいたらすぐできないと、その人が不幸になっちゃうかもしれないよ、できないと大変なことになるよっていうぐらいの気持ちがないといけないんだろうなと思いますけれども、なかなかその意識の変化っていうのは一朝一夕にはいかないというようなことを実感したということです。すみません、ありがとうございました。

大熊：これはコンボの活動にも通じるかもしれませんね。表紙に写っている方たちは幸せそう、よかったね、で終わらずに、そうできないとしたら、それは、

■一歩を踏み出すということが、すごく大事

丹羽さん：表紙モデルになる人は、撮影の時にコンボさんのおかげでこんな場をつくってもらってありがとうございますとよく言われるんですけれども、そのときに私がよく言うのは、いやでも一歩を踏み出したのは自分自身なんではないですかということをよく言うんです。つまり表紙に出てみたいという想いがあって、そして応募をするというプロセスがあるわけです。応募をしなければ、こちらがこういう方がいるんだということで、じゃあこの人を次に表紙にお願いしようということにはならない。

そういう一歩を踏み出すということが、私たちはすごく大事だと思っていて、『こころの元気＋』を読んでいる読者のはがきの感想ですごく多いのが、勇気をもらえましたっていうような言葉がすごく多いんですけれども、一歩を踏み出すそういうものっていうのは、どんな人であってもですね、何か心がめげてし

まったような時っていうのは、一歩踏み出せなくなってしまうんですけれども、そういう、一歩踏み出せないような社会ではなくて、どんなことがあっても前へ進める、で、前へ進むだけだと疲れてしまうので、そこに踏みとどまっていてもそれはそれで、オッケーだし、そんなような社会であるといいなということを思っています。

■チャレンジ精神とユーモアと

大熊：ありがとうございました。これまでは推薦した方にお立ちいただいてまいりました。ただ、コンボの推薦者は、太田美智子さんというライターで、今イタリアに行っています。日本は世界の中で桁外れに精神病院のベッド数が多く、統合失調症の方だけではなくて認知症の人まで閉じ込めちゃうという日本。一方、精神病院をなくしてしまったイタリアは、どうなのかというふうに調べに行っておられます。

本日受賞なさってここにお上がりになった方たちは、チャレンジ精神に富んでらっしゃって、社会にインパクトを与え、しかもユーモアも忘れない。我々医学ジャーナリストの鏡、私たちにとってはお手本だなあと、尊敬させていただいております。

おとなりの部屋に設けました懇親会で用意いたしましたお食事が冷めてしまいますので、とても心残りですけれども、ここで一旦閉じさせていただきます。

総合司会・杉元順子：長時間にわたって大変充実した、授賞式が催せましたこと感謝申し上げます。

わたくしどもにとって初めての試みですので、どうなることかと思いましたけれど、みなさまのおかげで、このような感激に満ちた授賞式が行えましたことを大変にありがたく存じます。これからも医学ジャーナリズム、医療のジャーナリズムおよび福祉ジャーナリズムの発展のために、ぜひご協力いただけたらありがたいと思います。みなさま、本日は本当にありがとうございました。　　(拍手)

懇親会で「タバコやんなっちゃった節」を披露してくださった渡辺文学さん

カナダの科学ジャーナリスト協会からもお祝いが